

<幼稚園 表現>

幼児一人一人の豊かな表現力を育てるための援助の工夫
— 絵本とのかかわりを通して —

豊見城村立上田幼稚園教諭 富田 佐代子

目 次

I	テーマ設定の理由	1
II	研究仮説	1
III	研究内容	
1	テーマのとらえ方について	2
2	表現と感性について	3
3	領域「表現」と他の4領域との関連について	3
4	アンケートの結果と考察	4
5	絵本に親しむための環境と教師の援助について	5
6	絵本についての考察	6
7	保育の実践を通して	7
IV	研究の成果と今後の課題	
1	研究の成果	10
2	今後の課題	10
	<主な参考文献>	10

<幼稚園 表現>

幼児一人一人の豊かな表現力を育てるための援助の工夫

— 絵本とのかかわりを通して —

豊見城村立上田幼稚園教諭 富田 佐代子

I テーマ設定の理由

幼稚園は、幼児が園生活において他とのかかわりを通して、人間として生きるための基礎となる力を身につけ自己を形成していく場である。また、幼稚園教育要領の領域「表現」のねらいには次の3点が示されている。

- (1) いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ。
- (2) 感じたことや考えた事を様々な方法で表現しようとする。
- (3) 生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。

「三つ子の魂、百まで」の諺のように、幼児期は人間形成に必要な基盤が培われていく大切な時期であると言われている。自分の思いを素直な気持ちで豊かに表現することは、将来、一人の人間として、よりよく生きていくために必要不可欠な条件である。幼児の表現の仕方には、言語や動作化、描画など様々な方法がある。どのような形であれ、表現することの喜びや楽しさをどの幼児にも味わって欲しい。表現することにより、見えない心の世界を、見えるものの世界に置き換え、精神の安定を図り、社会生活の基礎的能力の育成を培うものである。一人一人の幼児に、自分の思いや考えを言葉や身体などで豊かに表現する能力を身につけさせるには興味、関心を喚起させ、心に感動を与え、表現しようとする意欲へつなげることが大切である。その表現と結びつけるものの一つとして絵本がある。物語や夢の世界を間接体験し、想像力、創造性、やさしさ、思いやりなど豊かな心が育ち、そのことが自分の思いを表現せずにはいられない、いわゆる表現意欲をかきたててくれるのである。以上のことから幼児を多くの絵本に出会わせることは意義のあることである。

ところで、本学級の幼児の言語表現の実態として「あれ」「これ」「水・・・」など単語や代名詞を使う事が多く見られる。表現力の貧しさからかすぐに手を出したり、けんかやトラブルを起こすなどの直接的な行動に出ることも多い。また、話しかけられても表情が乏しく、反応も単発的である。このことは言語環境の貧しさ、とりわけ絵本とのかかわりの少ないのも一つの要因ではないだろうか。また、今までの私の実践を振りかえると、言語環境に対する認識の甘さから絵本に対して熱心な取り組みをしていたとは、必ずしも言い難い。絵本の読み聞かせについても、幼児の内面を大切にしたい読みの工夫が足りなかったことが反省点にあげられる。

これらの反省をふまえ、幼児に絵本とのかかわりを多く持たせ、幼児一人一人の豊かな表現意欲を育てるための教師の援助のあり方について、以下の点を考慮し、本テーマを設定した。(1) 日常生活の中で、教師の言葉かけの工夫をし、幼児との信頼関係をつくる。

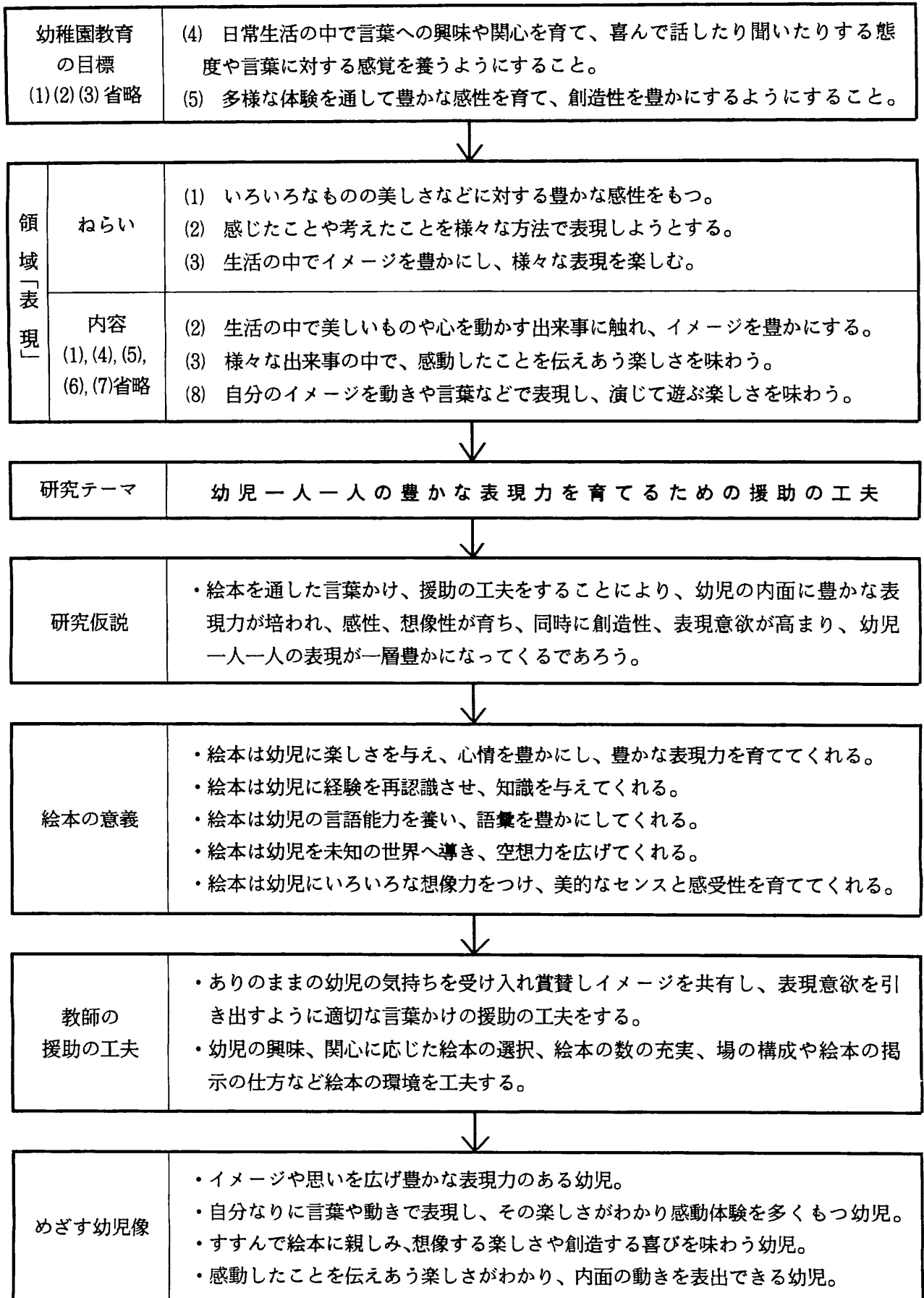
- (2) 絵本とのかかわりを多く持たせ、幼児の感動体験の蓄積を大事にする。
- (3) 幼児一人一人の感動や内面の動きに添った援助のあり方を探る。
- (4) 幼児の思いやイメージを表出させるように援助のありかたを工夫する。
- (5) 学級の絵本の環境を見直す。

II 研究仮説

絵本を通じた言葉かけ、援助の工夫をすることにより、幼児の内面に豊かな表現力が培われ、感性、想像性が育ち、同時に創造性、表現意欲が高まり、幼児一人一人の表現が一層豊かになってくるであろう。

Ⅲ 研究内容

1 研究テーマのとらえ方



2 表現と感性について

(1) 表現とは

表現とは自分の内面にイメージを思い浮かべて、外へ表すことを言う。イメージ通りに外へ表すことができる時と、思った通りにいかない時がある。豊かな表現を生み出すには豊かなイメージを必要とする。内面が表出されるのが表現である。思考、感情（感覚・想像・思考・感情）＝（イメージ）→技術（絵、製作、歌、話したり・動きなど）により→表現される。豊かな表現をするためには、人間的な豊かな内面の形成が大切である。表現の経験を繰り返すことによって、自己表現のための、勇気や自信を育てるのである。そのことは、主体的な内面活動の活性化を導きだすことである。表現することに慣れ、表現への勇気や自信をもち、素直に自己を表現することは、幼児期から習慣化しておくことが必要である。大人になってからではむづかしい。自己表現とは、自分自身の内面に深く根ざした表現のことである。表現活動とは、自分の内面に深く受け入れたイメージを土台として、表現意欲を具体的に外へ表すことである。そして、幼児の生活を中心に総合的に表現活動を考えることが大事である。それぞれに違った独自の良さを見いだす多面的な評価を大事にし、幼児の表現とは自己を表出する過程であり技術を身につけることが目的ではない。

(2) 感性とは

感受性、感覚、感情という内なる働きを感性という。外からの刺激を感覚し、その反応として、快不快・喜び・悲しみなどの感情がおこり、その原動力が、話す・動くなどの方法（技術）による行動的な具体化・形象化が表現になる。感覚とは五感を通して気づくことであり、周囲にあるものを内面に受け入れることである。感情は認識から生まれる。豊かな感性を生き生きと働かせるのが幼児期である。その幼児期に自然の不思議さ、神秘さに気づき、それを意図的に人間的心情を養うことへと結びつけていくことは大切である。そうすることによって、感受性が養われ感性が磨かれていくのである。

3 領域「表現」と他の4領域との関連について

(1) 領域「環境」とのかかわり

環境にかかわるとは、周りのものに気づく力を成長させ、感情を育てることである。幼児が周囲の環境に気づき、受け入れるという感性の内なる言葉を表現に発展させることによって、さらに、確かなものになる。以上のことから感性の源である環境の工夫が常に必要である。

(2) 領域「言葉」とのかかわり

言葉を使って時間・空間にないものを表現していく。自分の考えや感情を言葉として表現し、自分で話すことにより自信を得ていく。表現力豊かな大人の自覚と豊かな言葉が必要であり留意したい。

(3) 領域「健康」とのかかわり

「心の健康」は、暖かい環境の中で、安心してのびのび自己発揮、自己表現ができ、欲求不満のない安定した精神状態にあることをいう。のびのびした表現活動により、心のバランスがとれる。幼児期における心身の健康と表現のかかわりは、密接なつながりがある。

(4) 領域「人間関係」とのかかわり

幼児期においては、他者と自分との異同に気づくことが、人とのかかわりの基本となる。幼児の表現力を育てるということは、人間関係において、相手の心の読み取りや、相手に対する意志伝達の力を育てることである。

以上の事から領域「表現」について下記のように考えられる。

- 幼児の豊かな「表現」を育てることは、教師が幼児の心の内面の世界へかかわり、表現を読み取り、共感する姿勢をもち、幼児をまるごと受け入れることが大切である。
- 幼児の「表現」は、人間としての豊かな育ちを目指し、生活と結びついていることが大切である。
- 教師自身の感性を磨き、幼児と感動を共有し、豊かな心を育てることが大切である。
- 幼児の人間的心情を養うことを意識的に行うように心がけ小さな「表現」でも見守り育てていく。
- 豊かな表現意欲と幼児の内面の育ちは大きくかかわりをもつので、日々の生活で感動体験を多くもたせる。
- 「表現」は、各領域と関連が深く密接な相互作用を持つので総合的に考慮されるべき事項である。

4 アンケートの結果と考察

* アンケートの目的；家庭での絵本に対する考え方の実態を調査・把握・分析し、今後の保育に生かす。

* 対象：上田幼稚園全クラスの幼児の保護者

* 方法：園児を通して配布し、保護者が記入する。

* 実施：平成7年6月1日～6月3日 *回収率；65%（150名中、97名提出）

アンケートの結果				考 察	
(1) 絵本の読み聞かせをしているか。				<p>97パーセントの家庭で絵本の読み聞かせをしている事は、保護者も絵本に対して興味があるからであろう。しかし、残念なことに全く絵本の読み聞かせをしていない家庭もあるので、今後家庭との連携を深めつつ、園でも特にその幼児に絵本とのかかわりを配慮したい。</p> <p>毎日、絵本とのかかわりをもって読み聞かせをしている家庭もあり、絵本への強い関心を示していることがわかる。89パーセントの家庭が週1回以上の読み聞かせをしていることは、幼児にとって絵本とのかかわりが多く持てる家庭環境にあるのがわかる。</p> <p>読み聞かせている人は圧倒的に母親が多い。生活が特に母親とのかかわりが強く接触が多いことからくるのであろう。父親参観日やクラスだよりなどを通して絵本の読み聞かせの大事さを知らせていきたい。</p> <p>絵本の役割や、その大切な影響力を99パーセントの保護者がよく感じとっているので、機会をとらえてその有効性を話し、家庭でも絵本の読み聞かせを継続させたい。</p> <p>362種の複数解答の中から人気のあるベスト5の絵本を列記した。幼児は昔話が好きなことがわかる。また人気番組の絵本もよく読まれている。テレビ視聴や幼稚園での影響もあるので今後の読み聞かせの指導にも取り入れていきたい。</p> <p>親の本好きと幼児の絵本好きは関連が見られるだろうか。学級の幼児の観察とアンケートから見ると相関関係が見られる。</p> <p>親子で本屋や図書館へ出かける家庭が多い。新しい本や多くの絵本と出会う機会が多いことがわかる。しかし13パーセントの幼児については、絵本にふれる機会が少ないと思われるので、家庭と連携しつつ、絵本との出会いを作り出せるように努力したい。</p> <p>97パーセントが親子の話し合いの材料に絵本が取り上げられている。その事で、満足感と次も読んでみようという意欲へつながるであろう。</p>	
ア	はい	33名	34%		
イ	時々	60名	62%		
ウ	いいえ	3名	3%		
エ	その他	1名	1%		
(2) どの程度の読み聞かせをしているか。					
ア	毎日	20名	21%		
イ	週2、3回	43名	44%		
ウ	週、1回	23名	24%		
エ	月、1回	8名	8%		
オ	その他	3名	3%		
(3) 主に、誰が読み聞かせをしているか。					
ア	父	13名	13%		
イ	母	83名	83%		
ウ	祖父母	2名	2%		
エ	兄、姉	2名	2%		
(4) 絵本は知識や表現を豊かにすると思うか。					
ア	そう思う	96名	99%		
イ	思わない	1名	1%		
(5) 幼児の好きな絵本にどんなものがあるか。					
1	3びきのこぶた	14名			
2	セーラームーンR	13名			
3	ももたろう	12名			
4	しらゆきひめ	8名			
5	はらぺこあおむし	5名			
(6) あなた自身、絵本を好んで読むか。					
ア	はい	55名	57%		
イ	普通	41名	42%		
ウ	いいえ	1名	1%		
(7) 子供と図書館や本屋に行く事があるか。					
ア	よく行く	28名	29%		
イ	時々行く	55名	57%		
ウ	月、1回	5名	5%		
エ	行かない	8名	8%		
(8) 絵本を読んだ後、話し合いをもつか。					
ア	よく話し合う	24名	25%		
イ	時々話し合う	69名	72%		
ウ	話し合わない	3名	3%		

5 絵本に親しむための環境と教師の援助について

(1) 幼児が絵本に親しむための環境構成の工夫

- ① 他の幼児の遊びと、ある程度関連を持ちながらも、静かに見ることが出来る独立した雰囲気が必要であるので考慮する。
- ② どの幼児からも見え、教師側からも存在を認めてもらえる位置で、安心して取り組めるコーナー作りが必要であるので配慮する。
- ③ 家庭的な雰囲気を出す工夫をし、絵本を読みたくなるようにカーペット、テーブルなどを使う。
- ④ かかわってほしい絵本には、幼児が手にとりやすい所に掲示の仕方を工夫し、読みたくなるような環境作りの工夫をする。
- ⑤ 幼児がゆったりと絵本を楽しみ、明るくわくわくするような絵本コーナーの雰囲気を作る。
- ⑥ 満足のいくような時間の保証をしてあげ、幼児が絵本とじっくりかかわれるようにする。
- ⑦ 一人一人の幼児が、好きな絵本を選べるように数を増やす。

(2) 教師の援助の工夫

幼児が表現しようとする意欲を育てるには、一人一人の幼児の発達に即して、その時々で援助をしていく必要があろう。できるだけ自然に自由に表現できるように、幼児の気持ちや意見を受容し、共感激励し、適切に助言していくようにする。一人一人の幼児の内面を読みとり、信頼関係を築き、幼児を理解する。以上の事が教師の援助を考える時に大切な事であり教師の役割と言える。次に、援助を考える時の教師の視点について下記の表に書き表した。(阿部明子編著・『保育内容 言葉』参考)

表1 援助を考える時の教師の視点

表現 援助	自然に表現する	表現を意識化する
間接的援助として環境の構成や再構成の工夫をし、環境の準備をする。	<ul style="list-style-type: none"> ・快適、安心な状況、信頼関係。 ・多様な言語表現との出会い。 ・感情を豊かにする体験をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・新しい状況に出会う。 ・多様な言語表現との出会い。 ・新しい自己課題を見つける。
直接的援助で、表現の読み取りをする。	<ul style="list-style-type: none"> ・言葉の表現そのものを読み取る。 ・状況や感情の動きを読み取る。 ・励まし、承認、助言の工夫。 	<ul style="list-style-type: none"> ・何に気付いているか。 ・何をおもしろいと感じているかを読み取る。
直接的援助で、幼児の表現に答えるように努める。	<ul style="list-style-type: none"> ・幼児のおかれた状況や感情を理解する。(受容・共感) ・言葉以外の行動で具体的に答えていく手助けをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・幼児の気づきやおもしろさに共感する。 ・表現そのものの自覚化を促す。 ・幼児の表現をそのままくりかえす。 ・幼児の表現を補って、寄り添う形で繰り返す。
記録し評価する。	<ul style="list-style-type: none"> ・教師は記録をする事で幼児理解を深め幼児の見方を反省し、考察する材料にする。 	

(3) 教師の援助のポイントと幼児の育ちの方向

- ① 幼児の内面を理解し個人差に応じた援助をすれば、安定した気持ちで主体的に園生活がおくれる。
- ② 幼児と感動を共にし、まるごと受容すれば、何事にも興味を持ち自信を持って園生活がおくれる。
- ③ 環境や雰囲気、場の工夫をする事により、幼児は友達とのかかわりを深め、豊かな表現力を身につける。
- ④ 適切な判断・遊びの見通しをたてた助言であれば幼児は遊びを発展させるようになる。

6 絵本についての考察

(1) 絵本の役割について

幼児は絵本の中に多様な楽しみを見つけ出し、新しい体験や未知の発見・空想の広がり、登場人物の心など多くのことを学ぶことが出来る。発見した楽しみが絵本を見る喜びとなるのである。まず、幼児が絵本を楽しみ絵本を好きになる事が大切であり、生活の中に絵本を取り入れる事である。次に絵本の役割について教育的観点と芸術的観点からそのねらいを述べてみる。

- ① 語彙が増え、言葉を豊かにし言語能力を養い表現意欲へつながる。
- ② 知的好奇心や自然、科学性の芽生えを育て経験・思考・想像を広げ知識をあたえる。
- ③ 考えなければわからない深い意味を持ったものでイメージをふくらませてくれる。
- ④ 情緒の発達を促し、豊かな心情・人間性を養い心の解放をうながす。
- ⑤ 美的なセンスと感受性が育ち言葉で表現し、身体表現を楽しみ共感の体験を通し心が豊かになる。
- ⑥ 経験を再認識し、一層想像力を高め、創造性を育てる。

(2) よい絵本の条件について

絵本には単純絵本・生活絵本・物語絵本・科学絵本など数多い種類があり、幼児へ与える影響や効果もいろいろ出てくる。良い絵本の条件は幼児と教師と一緒に探し出し作り出すものである。望ましい絵本は一人一人の幼児の実態により決まるがいろいろな角度から考えて偏りのないように考慮すべきである。絵本を選ぶ時は幼児だけでなく教師も参加し、共にわくわく・ときどきの感動を味わい、より興味・関心を持たせるようにする。よい絵本の条件について以下にあげる。

- ① 幼児の発達に即して分かりやすく、おもしろさを与える絵本で、繰り返しがあること。
- ② 絵と文が結びつき、絵は芸術的にすぐれていて色彩はできるだけ単純明瞭であり、幼児の興味に即し、楽しさを与える絵本である。
- ③ 絵自体ストーリーの発展をもたらすもので、ドラマチックな展開がある。
- ④ 知識絵本の場合、事物をできるだけリアルに描いたものが多い。
- ⑤ 絵本は季節感やスリルがあり幼児の遊びから入り、文字がなくても絵を読んでいくものである。

(3) 絵本の読み聞かせの意義について

- ① 絵本の読み聞かせにより、語彙が増えて言葉の表現が豊かになり認識を確かなものにする。
- ② 思考力・イメージを広げ間接的にいろいろな体験ができ豊かな心情や豊かな表現力が育つ。
- ③ 知的好奇心や科学性の芽生えを育て、興味・関心・態度が旺盛になり生活を楽しむようになる。
- ④ 繰り返し継続して読んでもらえることは、内容を味わい心の安定感が得られ、情緒が満たされる。
- ⑤ 仲間同士刺激しあい、集団思考が育ち、幼児の受容言語が育つことで豊かな表現力が身につく。

(4) 絵本と紙芝居の違いについて

- ① 絵本は興味のある一部分を拾い、部分的な面白さを見つけることが出来る。つまり部分的な楽しみが何度でもできる。自分の欲求に合わせて場面を早く変えたり元に戻したり、何度も繰り返し見る事が出来、自分で簡単に操作が出来る。
- ② 絵本はいつでも好きなページへもどり途中の楽しみを見ることが出来る。
- ③ 紙芝居は画面が動き、画面は絵のみで文字は裏に書かれ読み手が読んであげる。
- ④ 紙芝居の文章は芝居を連想するようにその表現は劇的である。
- ⑤ 紙芝居は内容や説明文を作り変えたりして演じて見せるものである。

(5) 絵本とテレビの特性の対比について

- ① 絵本はテレビに比べて親しみにくいが、読み味わう中でじわじわと心にしみこむよさを持つ。
- ② 絵本は動きがなく静的で抽象的であるが、曲線的にイメージが心に迫ってくるものである。
- ③ 絵本は何度でも手軽に読み返せる利点があり、自分から見ようとする主体的な態度が要求される。
- ④ テレビはダイナミックで動きがあり、見る人に形や情景が具象的・直線的にはっきりとストレートに飛び込んでくる。そのために面白く親しみやすいと言う長所の特性を持っている。
- ⑤ テレビの短所は受け身的に見てしまい、自分では見直しができないことである。

7 保育の実践を通して

(1) 絵本の読み聞かせの実践と考察

< 実践例・1 > 期日・7月5日 絵本名「すきです ゴリラ」 著者名 アントニ・ブラウン作・絵

ストーリー・場面	幼児の様子・反応・言葉	教師の言葉かけ・援助
<ul style="list-style-type: none"> ・表紙 ・ゴリラとハナが一緒のところ ・ゴリラとハナ ・どうぶつえん ・おとうさんとハナ ・ゴリラとハナ ・おとうさんと動物園へ一緒に出かける所 ・おとうさんとハナ ・裏表紙 	<ul style="list-style-type: none"> ・木登り ・ぶらさがり ・うんてい ・日曜日もないの。(ふしぎさ) ・わかるよ。おりの中にいるからさ ・ハナはテレビをみているよ。 ・ハナは、ゴリラをみているよ。 ・女の子がゴリラを見ているよ。 ・ハナをだいて木から木へとんでい る。(わくわく、どきどき) ・おさるさんが勉強している。 ・ゴリラの絵本をよんでいる。 ・ハナとゴリラが動物園へきて、ゴリ ラをみている。 ・誕生日にプレゼントをもらう。 ・ゴリラといく。(充実感) ・ゴリラと映画を見る。 ・ゴリラと食事をする。 ・ゴリラとおどる。(満足感) ・ハナもゴリラも楽しそう。 ・おとうさんといっしょでうれしそ う。 ・ハナはおとうさんと遊べたからよか ったね。 ・ハナもお父さんも笑っている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ゴリラと女の子は何をしているかな (考えさせる) ・ゆうえんち・動物園にいったことが ないんだって。(気づかせる) ・動物たちさみしそうね。(共感) ・ハナはなにをしているのかな。 ・ゴリラは何をしているのかな。 ・さるは、何をしていると思うの。 (イメージをふくらませる) ・ゴリラとハナはなかよしだね。 (共感する) ・ハナはよかったね。 (安堵感) ・おとうさんも良かったね。 ・絵本をとじながら幼児の様子を見る

《考察》

- ・読み聞かせの工夫をすることにより、おりの中に入れられたオランウータンとチンパンジーの「淋しい心の動き」を読みとらせるように努力した。
- ・父親不在の寂しさを、ぬいぐるみのゴリラといっしょに夢の中で動物園へ行き、遊んで楽しい時を過ごして帰るというストーリーである。ところが現実でも父親と一緒に動物園へ行けることになったハナの喜びが伝わるのか幼児の表情がにこにこしていた。
- ・父親と遊べないハナの寂しい気持ちや父親と一緒にの楽しい気持ち、日曜日にも仕事に行く父親を不思議に思うのは、自分の生活と比較して考えるからであろう。
- ・前へ出てきて、ページをめくり、好きな場面を選ぶところが見られたのは、より興味のある好きなところが、見つかったのだろう。
- ・教師の言葉かけの工夫が幼児の言葉の表現を豊かに引き出すきっかけを作るであろう。
- ・父親とハナの心の通いあいが、見ている幼児の安心感を得たのでであろう。
- ・自分の思いを言葉で表現する幼児が多かったのは、多分この絵本が時期的にも適当な絵本だと思われる。

- ・「黒い傘をもった女の子が赤い傘をさしてお父さんを迎えにおつかいに出かけました。あひるの散歩を見たり男の子と出会ったりパンやさんや人形やさんを見たりしながら信号機を渡り、お父さんにかさをわたします。お父さんは喜んでおみやげを買って帰ります。」の内容で話を作った。
- ・文字なし絵本の投入は、ストーリーを考え作って話をするのが難しそうだった。
- ・男児と女児では女児が場の説明や話の展開や発言も多く見られた。
- ・かさの色が赤と黒で対照的なのは、幼児により興味を引きつけ、ページごとに話が聞けた。

- ・絵本から発展して劇遊びが見られ、自分の好きな役になってどの幼児も喜んでた。
- ・「うんとこしょ、どっこいしょ」とくり返しの言葉のリズムを楽しみながら声を出していた。
- ・みんなが力を合わせて、かぶが抜けた時は全員おもわず尻もちをついてクラス中が大笑いした。

(2) 保育実践 ①指導案 平成7年7月13日(木曜日) 上田幼稚園5組 男児18名・女児11名 計29名

幼児の姿	<ul style="list-style-type: none"> ・気のあう2, 3人の友達とせみとりや戸外遊びを好んでする。 ・絵本にかかわる幼児より粘土やごっこ遊びを楽しんでいる。 	ねらい	<ul style="list-style-type: none"> ・友達と遊びを楽しむ。 ・表現の喜びを味わう。 			
時間	8:15 ~ 10:00	10:00 ~ 10:40	10:40 ~ 12:20			
	登園	好きな遊び	片づけ	絵本の読み聞かせの実践	おやつ	降園
幼児の活動	<ul style="list-style-type: none"> ・あいさつ ・シールはり ・所持品 	<ul style="list-style-type: none"> ・水遊び ・せみとり ・砂遊び ・固定遊具 ・粘土 ・パズル ・折り紙 ・木登り ・絵本 ・ぬり絵 ・竹馬 	<ul style="list-style-type: none"> ・遊んだ物を片づける ・うがいをする 	<ul style="list-style-type: none"> ・絵本を見る「どうぶつえん」 ・友達と一緒に楽しく見る ・自分が感じた事を言葉や体で表現する ・友達の話の聞いたり動きを見たりする ・絵本を見た後、イメージした事や考えた事をクラスのみんなの前で表現する ・動物の泣きまね・歌をうたう 	<ul style="list-style-type: none"> ・おやつの準備 ・当番活動 ・手洗い ・片づけ ・歯磨き ・絵本を見る 	<ul style="list-style-type: none"> ・帰りの準備をする ・今日の反省をする ・明日の予定を聞く ・「さようなら」
教師の援助	<ul style="list-style-type: none"> ・一人一人を笑顔で迎える ・花や野菜に水やりをするように声をかける 	<ul style="list-style-type: none"> ・個の遊びを認める ・伸び伸びと遊べるように見守る ・幼児の言葉やつぶやきも心をとめる 	<ul style="list-style-type: none"> ・スムーズに片づけがいくように声をかける ・一緒に手伝う ・すすんでやる幼児をほめる 	<ul style="list-style-type: none"> ・見えやすいように場の設定をする ・幼児の反応を見ながら読み聞かせる 	<ul style="list-style-type: none"> ・当番の確認をする ・歯磨きの確認をする ・準備や片づけを確かめる 	<ul style="list-style-type: none"> ・今日の楽しかったことを話し合う ・落ち着いた雰囲気を作り安定感を持たせ明日に期待をつなげるようにする ・車に気をつけて、帰るように話す

②環境の工夫

- ア 絵本棚の絵本の見直しとして動物に関する絵本や図鑑などを掲示する。
- ・動物園 ・きみ、こねこだろ ・ねずみくんのチョコキシリーズ（3冊）
 - ・11ぴきのねことあほうどり ・みじかなどうぶつ集（15冊） ・その他（図鑑・月刊絵本等）
- イ 動きのある動物のペープサート（手・足・首・口等が動くもの）の準備
- ウ 室内の後ろの壁面構成・・・しゃぼんだまにのったネズミの絵を、きり絵にして貼る。
- エ 黒板の下の位置に動物の写真の壁図鑑を掲示し、幼児が手に取って触れられるようにする。
- オ 効果音として動物の鳴き声のカセットテープと動物の鳴き声の入った絵本を身近におく。

〈実践例・4〉 期日・7月13日 絵本名「どうぶつえん」著者 ポール・サイモン訳・紫門ふみ

保育者の働きかけ・援助	幼児の様子・言葉
<ul style="list-style-type: none"> ・「何が入っているかな」と買い物袋の絵本を見せる。 ・「いろいろな動物がでてくるね」と言って絵本の表紙を見せる。・作者はポールサイモンと言う。 ・表紙の裏を見せながら、「動物園の大ニュースってどんなニュース?」「知ってる?」「どんなニュースかなってみんなで見てみようか?」 ・絵本「どうぶつ」の読み聞かせをはじめ。 ・「あっち、こっち」と言いながら指を指す。 ・「むしゃ、むしゃ」と顔と口の表情で表す。 ・「やったーきりんさん、よかったね」と笑顔で嬉しい表情で話す。 ・「ありがとう。」とおじぎをする。 ・「どんなニュースだった?」（問いかけ） ・「一人ぼっちってどんなこと?」 ・「ぞうさん何している?」みんなで聞いてみよう ・「そうね、お花に水をかけるのね」・訂正して確認し気づかせる。 ・「がりがりがり」・共通の表現をすることによりイメージも共通にもてる。 ・「きりんさんどうしたの?」 ・「ほんとう、よく見ていたね」・すごいと認める ・「動物園へ行ったことあるかな」 ・「どんな動物がいたかな」・動物園からの手紙を ・「動物園へ行こう」とさそう。読む。 ・「さあ、ついたよ」 ・動物のイメージをひきだすように努める。 ・「夕方だからかえりましょう。」 ・「お母さんがまってるよ。」 	<ul style="list-style-type: none"> ・何が入っているかと引きつけられる。 ・「英語も読んで」・「何て書いてあるの」（興味、関心、疑問） ・「どんなニュース」・「とびきり面白いニュース」・「すごいニュース」 ・見たいなと絵本に関心を示す。（欲求） ・指で示した所を見る。 ・様子を見ている。 ・イメージの世界に共にはいり、共に喜ぶ。（共感） ・「まいご」・「一人だった」 ・「一人のこと」・「さびしいこと」 ・「ピーナツをたべている」 ・「花、かけてる。」・「水かけてる。」（確認） ・「がりがりがり」（同調） ・「首はさまれている」 ・イメージを身体表現する。（表現意欲） ・イメージの世界に入る。 ・友だちと一緒に動物の表現を楽しむ。 ・友だちがやるのを見て楽しむ（仲間意識） ・動物の鳴き声にも興味を示して「鳴き声遊び」を楽しむ。（楽しさを味わう）

《考察》

- ・今まで表現しようとしなかった幼児が言葉や動きで自分の思いを表現しようとする変容が見られた。
- ・絵本からの展開としての表現遊びは友達同士の積極的なかわりも見られ、とても楽しそうであった。
- ・豊かな表現力と絵本とのかわりは深く、絵本を通して得たイメージが膨らみとなり表現として表れる。
- ・幼児の思いが表現意欲へつながらるように教師の感性を磨き共感し、幼児理解を深めることが大切である。

保育の実践での教師の援助と留意点として

- 絵本が見えやすい所にすわるように気づかせ、表紙を見せながら絵本に期待を持たせるようにした。
- 幼児の反応を見ながら、声の抑揚や強弱に気をつけ、より興味がわくように話をすすめていく。(期待)
- 幼児の小さな動きや言葉も認め、表現がスムーズにいくように助言し励ましていく。(承認・賞賛)
- 教師も一緒に歌ったり動いたりして、幼児の緊張感をとるようにし、共に楽しむことができるようにする。
- 絵本を見ながら、幼児が自分の経験したことを思い出すことができるようにする。

幼児の活動の様子として

- 動物の声のテープに興味を示し、それを囲んで輪ができ、いろいろな言葉が聞けた。
- 絵本を見るときはグループにすわり、どの幼児も「どうぶつえん」の絵本に集中して見ていた。
- 動物の鳴き声のまねっこのときは表情たっぷりで、元気に声を出して歌うのが見られた。
- 動物になりきって、その幼児なりの動きや身体での表現にあらわれてくる。

IV 研究の成果と今後の課題

1 研究の成果

(1) 幼児側の変容

- 絵本に今まで興味を示さなかった幼児が、図鑑や絵本を見つけて一人で見たり友達と一緒に見たり以前に比べて絵本とかかわる幼児が増えてきた。
- 絵本を通して友達と一緒にいろいろなことを話し確かめる姿が見られるようになった。
- 絵本コーナーへのかかわりが多く見られ、おやつや弁当後にどの幼児も絵本を手にするようになった。
- 仲間同士の会話が増え、その時の言葉の表現が豊かになってきた。

(2) 教師の変容

- 個々の絵本のねらいや内容をより確かに受けとめ、絵本の環境を大事に考えるようになった。
- 幼児と信頼関係を深め、絵本の読み聞かせや言葉かけにも気をつけるようになった。
- 一人一人に応じた援助の仕方があり、表現力は幼児の感動体験と多くかかわる事を再認識した。
- 表現力は領域「表現」だけでなく総合的なものであり、幼児の生活のすべてに関連することを改めて確認することができた。
- 教師自身の感性を磨き、豊かな表現を心がけ、幼児の表現力を育てることの大切さを認識した。

2 今後の課題

- 職員間の共通理解のもとに、いい絵本の選び方、環境のあり方などを考え、絵本の分類、絵本カリキュラムの作成も考えていきたい。
- 幼児の心をゆさぶるような働きかけや、幼児の感性を育てるような教師の援助の工夫を探りたい。
- 保護者会や学級だよりで絵本の紹介や絵本の読み聞かせの大事さなどを知らせ、家庭との連携を図っていきたい。
- 幼児と信頼関係を築き、どの子も心を開き表現力が身につくように、読み聞かせの場の設定のしかた、教師の言葉かけの工夫を今後も努めていきたい。

<主な参考文献>

黒川建一編著	『表現』	ひかりのくに株式会社	1990年
村井潤一編著	『言葉』	ひかりのくに株式会社	1991年
佐藤宗夫著	『保育のなかの絵本』	いづみ書房	1989年
黒川建一編著	『豊かな表しに向けて－表現』	フレーベル館	1991年
文部省	『幼稚園教育指導書』増補版	フレーベル館	1989年
阿部明子編著	『保育内容 言葉』	建帛社	1990年